

中山道本庄宿戸谷（中屋半兵衛）家所蔵の俳諧一枚摺

兼子 順

はじめに

俳諧一枚摺は、一枚の用紙に印刷された俳諧関係の摺物で、俳人の間でお互いに配られたものである。俳諧の文字だけでなく、多くは多色摺の画が加えられていることが特徴となっている。寛政年間から文化・文政年間にかけて急速な流行を見るようになり、幕末期に庶民の間にも普及し、明治・大正・昭和期まで続いている。¹

俳諧一枚摺は、各時代の俳風や絵画との関連、俳人の交流などを知るために大変貴重な資料といえる。とくに近世後期の俳諧研究には、一枚摺は欠かせない資料とされる。しかし、資料が散逸しやすく、残されていてもほとんど整理がされていないため、その研究は遅れた分野となっていた。近年になり、美術館等の展覧会や、専門誌の特集²があり、研究も進み、分野についても注目されてきているといえる。

ただ当時、かなり多くの俳諧一枚摺が作成されていたことを考えると、今の発見ではまだ十分とはいえず、研究発展のためにも、その資料の発見、公開が望まれているところである。

筆者はすでに埼玉県立文書館に収蔵されている武蔵国横見郡久保田村（現吉見町）の新井（仇）家に残る絵入りの歳旦摺物について紹介した。³

本稿では、平成二十五年度から閲覧公開された中山道本庄宿（現本庄市）の戸谷（中屋半兵衛）家の俳諧一枚摺について紹介したい。⁵

戸谷家は、享保十八年（一七四三）に本庄宿で小間物屋中屋を開き、代々半兵衛を名乗り、江戸にも出店をもつ、関東でも有数の豪商として知られた家である。⁶ また、三代目光寿は、俳名双鳥と号した俳人で、高桑蘭更・常世田長翠等の当時著名な俳人と交流があった。四代目光敬（俳号清風・其樵）、五代目光孝（俳号榎蔭）も家業の傍らに俳諧に親しんでいる。三代目光寿は、文化期から天保中期にかけて俳諧活動を一時中断するものの、戸谷家は、三代にわたって俳諧活動をおこなう、武蔵国北部の春秋庵系の有力俳人の家として知られる存在であった。⁷

安政五年（一八五八）四代目光敬の時に御用金未返済を理由に店は閉じられてしまうが、文書群は現在まで残されている。商業関係の文書は勿論、俳諧関係の古文書も比較的よく残され、戸谷家文書の特徴となっている。

戸谷家文書は、商業文書を中心とする「I一般文書の部」と俳諧文書を中心とする「II文化の部」の二つに分けられている。「II文化の部」は、A俳諧摺物、B短冊、C扇・扇面、D俳諧書状、E俳諧版本、F

俳諧稿本・その他の六つに分類されている。俳諧一枚摺は、A俳諧摺物とF俳諧稿本・その他のなかに分類されている。

一 戸谷家所蔵の俳諧一枚摺の概要

戸谷家所蔵の俳諧一枚摺は、七七点ある。これら一枚摺には、干支だけで年号の記されていないものや、作成年代が記されていないものもあるが、内容等から年代を推定し補い、編年順に一覧にする」と別表のとおりとなる。最も古い寛政五年(一七九三)から明治五年(一八七三)までの約八〇年間のものである。ただ、この間全期にわたるわけではなく、寛政五年から文化十年(一八一三)までの期間の第1期と天保十一年(一八四〇)から明治五年までの期間の第2期に分けることができる。数としては、第1期が二点(No.1~12)、第2期が六五点(No.13~77)で、第2期のものが八割以上を占めている。また、第2期では、年により全くない年から嘉永三年(一八五〇)の一・二点まで様々であるが、弘化五年(一八四八)から嘉永三年(一八五〇)の三か年は、一〇点以上と特に多い時期となっている。

第1期の一枚摺物の大きさは、奉書紙の全紙を使用したものがほとんどである。全紙を六つ折にしたものと、全紙を折紙形式で使用し、それを六つ折や八つ折にしたものがある。また、No.2は奉書紙を四分一に切った中判で、四つ折にしている。

第2期になると、切紙が多くなり、安政二年以降になると、また奉書紙の全紙を使用したものがほとんどとなる。切紙は、縦が1cmから2cm前後、横は1.3cmから長いもので五六cmのものもある。切紙は、二つ折から六つ折にされ、表題のついた袋に入れられている。奉

書紙全紙のものは、折紙形式で使用し、それを三つ折にして、袋に入れられている。しかし、明治五年のNo.77〔春興〕は、全紙を四つ折にし、袋は付いていない。

第2期の特徴は、袋の付いたものが多いことである。

袋には、表題や連名などが摺り込まれ、送り手の落款印を捺したものが捺されているものもある。また、袋の裏には、摺物所の印が捺されているものもある。「雲錦堂」という小さな朱印である。「東都住吉町 雲錦堂製」(No.38)、「日本橋呉服町 雲錦堂」(No.58)と住所のあるものもあるが、摺物所印のあるものは、嘉永二年と三年に集中している。No.67には、摺物所「東都瀬戸物町飯田源蔵」と「彫工江川閨」の印があり、彫工の記載の唯一のものである。

袋の表題は、「春興」「三節」など摺物の内容を表したものの、内容や季節にあつた物の名やことばを摺り込んでいる。なかには「底なし腸」(No.14)など考えさせられる表題もある。また、差出人と宛先人のわかるものがかなりの数あることは貴重である。また、「本庄連」などと連名が記されているものや、「春秋」の朱印が捺されているものもある。No.46の袋には、「花丘連」とあり、「春秋庵」の朱印が捺され、裏に「雲錦堂」の朱印があることから、連の摺物を雲錦堂が摺って春秋庵の名で配っていることがわかる。袋表の庵号等も、一枚摺に入集する俳人名と結びつき、誰から配られたものがわかる。この頃の春秋庵は梅笠、無窮庵は太魯、焦林社は西馬、不如庵は寄三、佐倉梅雪庵は如升、紙葉は紙葉軒で音好(野井)、櫃寮閣は青荷である。袋と中身の摺物が離れずに多数残されていることは貴重であるといえる。

内容は、正月に配られる歳旦・春興が多く、そのほか夏興・秋興など季節のものや、改名披露、追善などもある。絵入りのものが多いが、模様のもや、文字だけのものもある。

第1期では、双鳥の入集したものと、双鳥と交遊のある巢兆・長翠・士朗などからの一枚摺で、絵が添えられたものもある。No.1・7は、巢兆自身が描いた画を添えている。版下筆者は、No.7の其成のほかは、記載がない。

第2期では、戸谷家の四代目清風（其稚）・五代目榎蔭の入集したものも少なくないが、はじめ催主が碩布・太魯関係、次に梅笠・太魯関係、その後に梅笠・逸淵・西馬関係、さらに逸淵・寄三関係となっていく。第2期を通じて春秋庵の系統は変わらない。ただ、同一年にいくつもの連から一枚摺が配られている年が何年もある。また、江戸の古武良、佐倉の如升が入集したものも多い。

絵は春関連が多いが、画題は多様である。絵師としては原田圭岳（四条派）、柴田是真（四条派）、山形素真（谷文兆門人）の作品が多く、三人の合作（No.73）もある。他の絵師は一、二作品ずつであるが、大西椿年（南画）や佐竹永海（谷文兆門人）など著名の絵師の作品もある。版下筆者は、第2期のほとんどの一枚摺に記載されている。前半はほとんどが松軒の書で、その後⁽⁸⁾に得齋・鴉波⁽⁹⁾・董齋⁽¹⁰⁾・董仙⁽¹¹⁾の書が多くなる。他に、⁽¹²⁾繞岡輝松⁽¹³⁾・梅素⁽¹⁴⁾などの書もある。

第1期では一枚に入集者が三人から二人までで遠方の俳人が多い。第2期は入集者が一、二人から四〇人くらいまでと様々であるが、安政二年以降になると、一〇〇人以上のものもあり、最高は安政二年のNo.70の「春興」で、一五四人の入集者数となっている。

二 本庄関係の俳諧一枚摺

次に、本庄関係の俳諧一枚摺について見てみたい。

第1期の頃の戸谷家は、三代目双鳥が闍更や長翠と盛んに俳諧活動を行った時期であり、寛政五年に双鳥が出版した句集「此まこと」の中にも本庄連の句を掲載している⁽¹⁵⁾。また、寛政四年（一七九二）の常世田長翠筆の「春日満興」は、双鳥も含めた本庄連が発行した一枚摺である⁽¹⁶⁾。しかし、戸谷家所蔵のこの時期の一枚摺には本庄連として一枚摺は見当たらない。その後、双鳥は俳諧活動を中断し、再開するのは第2期となる天保中期ごろと見られる。天保八年（一六三七）二月に本庄連が川村碩布の米寿の賀会を開き、同年六月には碩布の門弟太魯を迎え、戸谷邸で双鳥と子為春の三人で三吟歌仙を巻き、八月にも碩布・太魯・双鳥・為春と女婿清風（其稚）の五吟歌仙を巻いている⁽¹⁷⁾。九月・十月にも句会が催され、戸谷家では家族ぐるみの俳諧活動となっている。当時、太魯は本庄に無窮庵を結び、この地の俳諧を指導しており、碩布はたびたび本庄を来訪している。本庄連の活動も活発となり、天保八年秋、同九年春、同十二年春に碩布・太魯を含めた俳諧一枚摺を発行している⁽¹⁸⁾。ただ、天保八年と九年の一枚摺には、戸谷双鳥も清風も入集していない。本庄連の一枚摺が何度発行されたかよくわからないが、経費もかかることからそう多くはないと考えられる。

戸谷家所蔵のものでは、No.15の天保十三年（一六四二）の「春興」とNo.72の安政四年（一八五七）の「春興」の二点が本庄連として発行された一枚摺である。

No.15の天保十三年の「春興」(図1)は、袋表に「あそびくさ 本庄連」と摺られている。「あそびくさ」は、柳のことで、春の季語である。本紙は中判を三つ折りにしたもので、巻頭に碩布の句を載せ、大西椿年が描く小鳥と手毬の形のしんこ飴二本を三色刷りで載せ、以下一行明けて清風を先頭に知一・為春・恒女・鳳毛・土晦・楽只・紫好・寄亭・池月・辰夏・酔月・有志・清雪・一鶴・双鳥まで一六人の句が続き、巻軸が太魯の句となる。版下筆者「半儂書」と記されている。本庄連が戸谷家を中心にして太魯の指導のもとで活動していたことがわかる。

No.72の「丁巳春」とある安政四年の「春興」(図2)で、袋に「初ミまち 武蔵本庄連」と摺られ、奉書紙を横半分に切った長判を四つ折りにした用紙に、素真画「琵琶図」が添えられ、其椎をはじめに汶平までの二五人の本庄連の連中の句が記され、そのあとに青荷、弘湖、浪兮女、酒雄、ミきを、西馬と春秋庵系の各地の高弟の句が続き、巻軸が逸淵となっている。版下は陽波である。

天保十三年と安政四年の本庄連の構成は大きく変わっている。この一五年間には、天保十四年十一月に碩布が没し、弘化元年(一八四四)一月に戸谷為春が一八歳で没している。嘉永二年(一八四九)四月に双鳥が没し、十月には太魯が三八歳の若さで没している。また、久米逸淵が安政二年(一八五五)六六歳の時に本庄に移住しているが、天保十一年にも逸淵入集の一枚摺(No.13)があり、嘉永二年の「春興」(No.35, No.36)にも、すでに清風とともに逸淵も入集しており、本庄との関わりはあったとみられる。

安政四年ごろの本庄連は、逸淵の指導のもとで、汶平・其椎が中心

となり活動していたといえる。汶平は、本庄宿の飯盛旅籠羽生屋の主人田村宗吉である。No.71の安政四年の「春興」(図3)は、袋表に「かしのかけ」と摺られ「檀寮閣印」の印があり、「其椎様」の小札が付く。碩布ゆかりの檀寮庵発行のもので、奉書紙全紙に二段で一〇九人が掲載され、巻頭の上段最初に汶平・其椎の二人が載り、「素信」の朱印で蓬摘図が描かれ、下段最初に梅笠、西馬、酒雄、浪兮、弘湖、逸淵と続き、巻軸に檀寮庵青荷となっている。本庄連とのつながりがわかる。

No.75の安政六年の武蔵野連の「春興」(図4)は、右下半分に素真が柳の下で海苔を干す女性と側で遊ぶ子供を彩色で描き、上下二段で二八人の句と巻軸に逸淵の句を載せる。上段にある寄三は中瀬村(現深谷市)、笈言は上州今村(現群馬県伊勢崎市)、真葛と漁友は上州樋越村(同前)、半湖は伊勢崎に庵居、睡虎と花雄は上州群馬郡、其好は上野台村(現深谷市)、都丸は榛沢村(現岡部町)、青荷は八幡山町(現本庄市)の人であり、下段の木奴から保水まで七人は本庄の人である。同年二月十日に瓢隠居(逸淵)知事で興行があるが、出席者二八人のうちのかなりの人が重なっている。

本庄連としてまとまりのある一枚摺は、戸谷家文書ではNo.15・No.72・No.75の三点となる。他には本庄連の中心となっている汶平・其椎・榎蔭が入集する一枚摺はかなりある。

梅笠は、戸谷家に来るこの時期のほとんどの連の摺物に名を見せ、単独のものもあり、戸谷家や本庄連との強い関係がうかがい知れる。梅笠は、碩布の門人で、逸淵の後に春秋庵を継いだ宗匠である。

一枚摺に入集する経緯についてみると、No.60の嘉永七年七月の「秋

興⁽²⁹⁾ (図5)は、梅雪庵如升を中心とする下総佐倉の連の一枚摺で、逸淵・西馬とともに其稚も入集している。江戸神田の梅笠から本庄宿の其稚に宛てられた同年七月六日付の書状に「扱さくら如升小摺出来二付、玉句猥ニ加入備貴覽候、御笑受可被下候、尚如升方へ一封御惠贈希候」とあり、本人の承知なしに句が入集していることもあり、作成人からでなく、配られる場合もあったことがわかる。

三 太魯(魯仙)関係の俳諧一枚摺

次に本庄連と関わりの深い太魯関係の一枚摺について、見てみたい。太魯は、文化九年(一八一二)生まれ、比企郡熊井村(現鳩山町)の人で、北原姓。別号無窮庵、川村碩布門で、二世六氣庵を継いでいる。⁽³¹⁾ 師碩布の意志を継いで弘化二年(一八四五)に『八翁六百題発句集』を刊行、この集は小二、知足庵如是道人と戸谷双鳥の三名の序で、春秋庵梅笠が跋文を書いている。しかし、太魯は、嘉永二年(一八四九)十月に三八歳の若さで没している。本庄宿や小川町栃本などを拠点に活躍していたことが知られている。⁽³²⁾

前項で述べたように、太魯は天保八年頃から戸谷家や本庄連と関わるようになる。戸谷家文書の一枚摺のなかにも太魯関係のものはいくつか多く残っている。すでにみた天保十三年の本庄連のNo.15〔春興〕は、巻軸に太魯の句を載せている。

その三年後の弘化二年のNo.16「海晏寺山めぐり六くさの楓探題」は梅笠外四人と太魯の六人の句が載り、左端に「春秋」の印が押されている。袋には宛名の小札が貼られ「清風君」と記され、春秋庵梅笠からの配り物といえる。品川鮫洲の海晏寺は紅葉の名所である。

弘化五年(一八四八)には太魯が入集する一枚摺は六点ある。うち三点は巻軸を梅笠と太魯が並び、残り三点は太魯が巻軸となっており、太魯の指導を受ける連や個人の摺物といえる。俳名から人物がわかるものでは、No.18の日は西戸村(現毛呂山町)の山本坊徳栄で碩布門人、誠廬は番匠村(現ときがわ町)の医者、No.20の仙晃は江戸の人、⁽³³⁾ No.26の大瓠は桃木村(現ときがわ町)の医者、No.24の甫水は青山村(現小川町)の人である。比企地方の俳人が多く、恐らく碩布の没後に太魯が引き継いだものと思われる。

年号が記載されていないNo.29の歳旦の一枚摺(図6)には、袋に「末広 無窮庵」と摺られ、柴田是真が扇子に印章の図を描き、句とともに「太魯改魯仙」とあり、太魯が魯仙に改称したことがわかる。

嘉永二年(一八四八)の四点の〔春興〕には魯仙の名が見え、同年春には改名されている。前年春以降この間に改名したといえる。

魯仙名のあるものは五点で、すべて梅笠が巻頭か巻軸に句を載せている。No.32の素雪は平村(現ときがわ町)の人で碩布の門人、No.33の五雲は黒山村(現越生町)の人、No.34の一遊は白井沼村(現川島町)の人、No.37の薬水は今宿村(現ときがわ町)の人、有柳は川角村(現毛呂山町)の人で、ともに碩布の門人である。

すべて表題の摺られた袋がつき、用紙は奉書紙を八分の一にした八つ切判や横半分にした長判などである。絵師は、是真、圭岳などで、版下は松軒が書いている。弘化五年(一八四八)のNo.21春興は、「末ひろ」と表題が摺られた袋に、縦三二cm×横一一cmの用紙を横二つ折りにし、圭岳が末広を描き、金泥で縁取りされた扇面に成隣・太魯・梅笠の三人の句が書かれている。翌年の嘉永二年(一八四九)のNo.31

の春興(図9)は、「春興」と摺られた袋が付き、八つ切の用紙に是真が色紙の貼られた鶏の絵馬を描き、色紙の中に成隣・魯仙・梅笠の三人の句が書かれている。

魯仙は嘉永二年十月に没し、一周忌となる翌三年冬にNo.50の魯仙仏追悼の一枚摺物(図7)が出されている。冒頭に魯仙仏の句が載り、次に逸淵・見外・卓郎・西馬などの宗匠七名、次に大瓢・為一・日二・誠廬など一七人、その次に知一・汝平・榎蔭など本庄の門人六人、そして梅笠と清風が詞をそえて句を載せている。金箔を散らした薄墨色の用紙を使用し、袋表には「氷る露」と摺られている。戸谷清風が中心となり発行しており、本庄連と魯仙との強い関係が窺い知れる。

太魯(魯仙)の没後、本庄連の指導は逸淵、西馬、寄三と代わるが、春秋庵を継ぐ梅笠との関わりは強かったと見られ、戸谷家文書には梅笠関係の一枚摺が多く残されている。

四 是真関係の俳諧一枚摺

戸谷家所蔵の俳諧一枚摺にはほとんど絵が添えられている。その絵を描いた絵師をみると、原田圭岳が一二点と最も多く、次に柴田是真が一〇点、山形素真が八点、是真・圭岳・素真の合作が一点で、他の作者は一、二点ずつとなっている。落款印のみで、銘のないNo.30は、No.35に同印を使用し是真銘があることから是真とした。なお、この印は後に素真に譲られたものか、No.75安政六年の春興では素真が使用している。

ここでは、とくに幕末から明治にかけて一枚摺物に掲載する絵として人気があった是真関係の俳諧一枚摺について見ていきたい。³⁶⁾

柴田是真は、蒔絵師として著名で、鈴木南嶺・岡本豊彦に師事、円山四条派の画家である。幕末から明治にかけて、一枚摺の絵として最も人気があった絵師であり、とくに江戸の大通として知られる細木香以とは親しく、香以の一枚摺の絵は是真が多く描いているといわれている。³⁹⁾

年代をみると、嘉永二年が五点、同三年が二点、安政四年・同五年・明治五年が各一点、計一〇点である。前項でみたNo.29を除く九点は春興である。

嘉永二年のNo.30(図8)は切紙に右半分から左下にかけて鉢植えの黄色の花を咲かせた福寿草と注連飾りを描き、梅笠他四人の句を載せ、末に「酉の春 松軒書(印)」と干支と版下筆者名が記されている。絵には落款のみで作者名がないが、No.35と同じ落款であるため、是真の作とわかる。袋には「筆はしめ」と摺られ「春秋」の落款が捺され、袋裏には摺所「雲錦堂」の朱印がある。春秋庵梅笠から配られた一枚摺である。入集の旧左は青梅の俳人横川貞八郎である。

同年のNo.31(図9)は、雄鶏の絵馬の上に金箔を散らした色紙がはられ、色紙に梅笠他二人の句と、年、版下筆者を記す。酉年に因み色紙の下から雄鶏の尾がみえる。

同年のNo.32(図10)は、右下半分に青畳の上に置かれた羽根箒と朱肉入れを描き、梅笠他六人の句を載せる。誠廬は番匠村(現ときがわ町)の小室玄長、素雪は平村(現ときがわ町)の峯岸寅次郎である。

同年のNo.35(図11)は、上部から右端にかけ青竹を半分に分った竹樋を渡し、水が流れ、落ちる図を描き、梅笠他一七人の句を載せる。入集者には、梅笠の師八十一翁梅室や、為一、逸淵、西馬がおり、巻

末の梅笠の前には戸谷家の四代目清風の句を載せている。

嘉永三年のNo.40(図12)は、右半分に三色の菱形模様の袱紗の上に置かれた能面と散らされた松葉を描き、梅笠他四人の句を載せる。巻末の句は一遊で、白井沼村(現川島町)の小高元張である。袋には、「いねあくる」の表題と「春秋」の朱印が捺され、梅笠から配られた一枚摺であることがわかる。

同年のNo.47(図13)は、緑色の下敷きの上に紙が置かれ、右下に印籠の付いた矢立と梅の花・蕾が散らされた図を描き、紙の部分に梅笠他四人の句を載せている。

安政四年のNo.73(図14)は、左端に満月と桜の木を描き、枝に「是真」の木札を下げ、右端にも桜の木が二本描かれ、それぞれに「素真」と「圭岳」の落款が書かれた木札を下げている。是真・素真・圭岳の三人の合作となっている。中央に二段で一五人の句が載る。巻頭一句と巻末三句には詞書が付いている。安政四年四月に細木香以が催主となり、浅草の浅草寺裏山で開かれた桜花見の句会の摺物である。⁴⁰⁾

同年のNo.74(春興)(図15)は、香以とその取り巻きによるもので、茶屋の主人武田屋馬平、戯作者柳下亭種員、幫間鳥羽屋小三治、俳諧師の野村守一、牧冬映などで、絵師柴田是真も取り巻きにいた。香以は、俳諧師、役者、関取、落語家、書画家などと広く交わり、別号が鯉角、江戸新橋山城河岸の酒屋撰津国屋の子で、俳諧を鳳朗、逸淵に学ぶ、書は松本董斎に学んだ。安政三年九月に父親が没し、跡目を継いでいる。安政四年には鯉の絵の収集を始め、秋には永機を招いて鯉の句会を開いている。

明治五年のNo.77(春興)(図16)は、朱塗りの化粧台を右三分の二

に大きく描き、金具の部分などには金泥を使用し、赤色は洋赤が使用されている。歌舞伎役者の三代目沢村田之助で俳号を曙山と号した。田之助は、幕末から明治にかけて、美人女形として人気を博した。描かれた化粧台の柄鏡の入れ物には田之助の定紋の鉄菊をあしらっている。左に大相撲の関取・行事、新吉原遊郭の花魁、歌舞伎役者の句を三段に載せている。最後に「梅素書」とあり、宮城玄魚が版下筆者となっている。田之助は、この年一月に歌舞伎役者を引退し、芝居茶屋紀伊国屋を経営し始めている。曙山の句の詞書に、引退と俳諧の道への出立のことをのべ、句を載せている。⁴¹⁾

おわりに

以上、戸谷(中屋半兵衛)家所蔵の俳諧一枚摺の概観と、本庄関連の一枚摺、本庄の俳諧指導者の一人太魯関係の一枚摺、幕末・明治期に絵師としても人気であった柴田是真関係の一枚摺について、見てきた。

戸谷家所蔵の俳諧一枚摺は、寛政期から明治五年にかけての七七七の資料である。文化・文政期から天保十年までの空白はあるが、近世後期から明治にかけての俳諧一枚摺の様相と変遷を知る貴重な資料といえる。特に、戸谷家文書には俳諧一枚摺以外の俳諧資料も残されており、今後様々な角度からの研究が進めることができる。

幕末期の俳諧一枚摺についても、同一年にこれだけ複数のもものが残されている例は少なく、当時爆発的に流行したといわれる俳諧一枚摺の実態を研究することのできる貴重な資料群といえる。

最後になりましたが、戸谷圭一郎氏には、本編作成にあたり、いろ

いろいろ配慮いただいた。感謝申し上げます。

注

- (1) 雲英末雄「多色摺の歴史と俳諧一枚摺をめぐる」(『江戸文学』二五、二〇〇二年六月)。同「俳諧一枚摺について」(柿衛文庫調査図録第三号『俳諧一枚摺』平成三年四月)。
- (2) 『俳諧のすり物一枚摺の美』(平成三年、柿衛文庫)、『粹人たちの贈り物 江戸の摺物』(平成九年、千葉市美術館)、『江戸の華 浮世絵展 錦絵版画の成立過程』(平成十一年、町田市立国際版画美術館) などがある。
- (3) 『江戸文学』二五「多色摺の歴史と俳諧一枚摺」(二〇〇二年六月)。『文学』第六卷第二号「画と文の交響」(二〇〇五年三・四月)。
- (4) 拙稿『新井(仇)家文書にみる絵入り歳旦摺物について』(埼玉県立文書館『文書館紀要』平成二十五年三月)。
- (5) 埼玉県立文書館収蔵文書目録第五二集「戸谷家文書目録」平成二十五年三月。
- (6) 拙稿「関東における地方商人の江戸進出―本庄宿中屋戸谷半兵衛家の経営実態とその展開―」(『埼玉県史研究』第二七号、平成四年三月)。
- (7) 矢羽勝幸編「戸谷文庫俳諧資料集成」昭和四十三年十一月、同「戸谷文庫統俳諧資料集成―戸谷双鳥伝―」(昭和五十二年十一月)。本庄市「本庄市史 通史編Ⅱ」平成元年三月。小林甲子男「埼玉俳諧史の人びと」(平成三年二月)。
- (8) 松軒は、文耕堂と号した江戸八丁堀住の書家、野沢氏か。
- (9) 原得斎は幕府儒者で、名は義胤、字は正道。
- (10) 西村鵬波は丹後田辺藩の右筆と伝えられ、俳号青柿、為山門である。
- (11) 松本董斎は中井董堂の門人で、通称正輔、正義、草書を得意とした。
- (12) 薫仙は薫斎の長男、書家で、将棋の駒字を得意とした。

(13) 池田綾岡。江戸日本橋の呉服屋の生まれで、絵を柴田是真、書を中川憲齋に学ぶ。浮世絵師、書家。

(14) 宮城玄魚。梅素亭玄魚。はじめ経師屋で、書画家。御家流書家武田交米に師事。書画の版下を得意とした。俳諧は抱儀門。

(15) 戸谷家文書No.七九四二。前掲「戸谷文庫統俳諧資料集成―戸谷双鳥伝―」収録。

(16) 前掲「本庄市史 通史編Ⅱ」。

(17) 前掲「戸谷文庫統俳諧資料集成―戸谷双鳥伝―」収録。

(18) 前掲「本庄市史 通史編Ⅱ」。

(19) 天保十三年 本庄連春興(戸谷家文書No.七二〇三) (袋表)「あそひくさ 本庄連」

見て居れハ殖る

様なり残雪 碩布

椿年(朱印)「楚南」(しんご鉛図)

鶏の声さゆるなり今朝の春 清風

数の子の子めつらしき程ふえにけり 知一

太箸に三夫婦そろふ山家かな 為春

何事も忘れて清しはつ鳥 恒女

田つくりや升て計りてふしの山 鳳毛

思ふ事暗てかすミを見る日かな 士晦

宿かして素顔が見たし懸想文 柴只

一りんて事のたりけり玉つはき 紫好

梅か香や不意と出来たる碁の相手 寄亭

春の水枕にしてそたのしまん 池月

一ツ家の大破風見えて日の長し 辰夏

七種や男世帯も不自由なき 酔月

若水や凡吉事の汲はしめ 有志

人の顔計り臚の月夜かな

清雪

口ひるのかわく隙なき御慶哉

一鶴

つくく〜と見れハ蜺の動きけり

双鳥

喰積のかいしきにせん夷幣

大魯

とらのとし

半俣書 朱印「半后」

(20) 安政四年 本庄連春興(戸谷家文書No.七二二)

(袋表)「初ミまち 武蔵本莊連」

素真(朱印)「素真」(琵琶図)

雪とけの雫に青む野山かな

其権

掃退けて鶯まつや散松葉

木奴

いさましきものゝはしめそ小松曳

知一

叱られた子が誉らるゝ真書かな

喜久丸

大空やわたかまりなき春の風

蓼虫

水曳をむすふ手にさす初日哉

蓼水

行もとり杖をはなれす飛小蝶

梅牛

相伴をかへてすゝむる雑煮かな

戸方

世なミよき年柄見えて門かさり

都丸

鶯の初音をミやけはなし哉

兼鳶

月と日を栞りに咲て福寿草

桃樵

薬子と呼ばれしも今ハむかし哉

月庵

うつくしう俵かさるや里の春

竹二

正月ハ翌日の遊ひの工夫かな

文岱

初鶏や家うち揃ひし朝きけん

文事

枝かへる間を鶯の綾音かな

竹丈

年々の枝のくほりや梅の花

文兼

めつらしき人に逢けり梅やしき

文紙

真直になひくとんとのけふり哉

飛歳

中山道本庄宿戸谷(中屋半兵衛)家所蔵の俳諧一枚摺(兼子)

風の香やふと身をかはず藪の梅

軽重

おとろいて見直す夜の柳かな

竹林

取次の立派に出すや懸想文

保水

大箸を景物に出す旅籠かな

三好

初鶏に雛もましりてうたひ鳥

文川

眠らずに居しや初日のつくは山

汶平

むつまじき世にハいつかす削かけ

青荷

溜り井も水上ありてはるの水

弘湖

え方から夜ハしらむかと思ひけり

浪兮女

鶯や立年月のわすれ草

酒雄

長き日のまたく延るはなし哉

ミきを

立日からあふるゝ春のけしき哉

西馬

ちる露や花も及はぬ朝柳

逸淵

丁巳春

鷗波書(朱印)「昌点」

(21) 逸淵は、児玉町久米家の養子となつたといわれ、川村碩布の門人で、文

政八年ごろに高崎に逸淵舎を設け、俳諧師として独立、文政の末年に碩布

より春秋庵を譲られ、春秋庵五世を称した。天保八年(一八三七)江戸に

移住し、春秋庵を弟子加舎梅笠に譲っている。しの木弘明「俳人久米逸淵」

平成十年四月。

(22) 前掲「本庄市史 通史編II」。

(23) 安政六年 武蔵野連春興(戸谷家文書No.七二二〇)

(袋表)「蟻むすひ 武蔵野連」

素真(朱印)「霞」(母子海苔乾し図)

日すからの遊ひ相手や春の水 寄三

陽炎のうへにももゆるいとまかな 筋言

寒かりも出揃ふ梅のちる日哉 真葛
 色ふかくなる野の水のぬるミかな 漁友
 香をしたふそゝろ歩行や闇の梅 巴静
 昇る日の稲つむ顔をてらしけり 塘洲
 外に眼のちり処なき初日かな 就淵
 夜八門の梅もまもるか翁丸 半湖

それくくに色音尽して百千鳥 睡虎
 初夢にミしやたしかに初さくら 花雄
 蓬萊のうしろへまはる女かな 丈雪
 捐火にもまかす旅寝や去年ことし 其好
 茶一はい去年とことしのいとま哉 真瓢
 水鳥の梢に遊ぶ春日かな 真水
 幸籠の中まで養るからず哉 香節
 花の留守秋のくれにも劣りけり 半令
 うたゝ寝ハ遊ひ労れか草の蝶 司水
 松の香にむせて空見る子の日哉 脩太
 蟻田にし転ひ合けりもととり水 都丸
 しのはしきひとつや梅にほとゝきす 青荷
 梅の木も見そへてふかし松飾 木奴
 月花にむかふ戸口や藁合子 桃樵
 風かをる齒朶のそよぎや門かさり 窓鳶
 聞人にある黄鳥の初音かな 知一
 礼うけを待間匂ふや福寿草 竹女
 輩の子を枝に剣けり桃の花 鏡山
 身のうへの花咲せあふ睦月哉 汶平

御降の名を一日のなかめかな 保水
 熨斗目着てむかし姿やけさの春 夢香
 ミつ輪くむ人もさそふて小松引 久女
 こそことしすれあふ袖や日本橋 鷗居
 節折もせぬ風ふくやつくくし 可洗
 舞そめや扇になひくひとこゝろ 蕾風

古池のふる声なからはつ蛙 逸淵

己未春 鴨波書(朱印)「昌点」

(24) 内野勝裕『埼玉俳諧人名辞典』平成十五年三月。以下、埼玉県内の俳人について、特に断らない限りは同書を参考にしてゐる。

(25) 前掲「俳人久米逸淵」。上州の俳人について、特に断らない限りは同書を参考にしてゐる。

(26) 戸谷家文書No.八〇四四。

(27) 戸谷清風・榎蔭の句は以下のとおりである。

初そらの青ミたつるや池水面 清風(嘉永二年〔春興〕No.七一九八)
 酒の酔醒る間もなし松の内 清風(嘉永二年〔春興〕No.七二〇〇)
 眉の莖はらふて向ふはつ日かな 大齡
 恵方の枝のにはふまつ風 清風(嘉永四年〔春興〕No.七二七五)
 曳に出たこゝろ引るゝ小松哉 榎蔭
 千枝八千枝春もとゝきて梅の花 清風
 朝ほらけ眼のさやはつす花の山 其椎(安政二年〔春興〕No.七二六一)
 若草の裏葉も見せぬそよぎ哉 其椎(安政二年〔春興〕No.七二六八)
 若草の裏葉も見せぬそよぎかな 其椎(安政二年〔春興〕No.七二〇六)
 のほる瀬の魚にも月のしつく哉 其椎(安政二年〔秋興〕No.七二二二)
 こつそりと先見て来るやはつ桜 其椎(安政二年〔春興〕No.七二一四)
 若くさのうら葉を見せぬ戦き哉 其椎(安政四年〔春興〕No.七二〇八)

(28) 内野勝裕「樞寮碩布と春秋庵をめぐる人々」昭和六十一年七月。

(29) 嘉永七年 佐倉梅雪庵秋興(戸谷家文書No.七二〇五)

(袋表)「新涼 佐倉 梅雪庵」

応需 素真書 (朱印)「素真」(鐘旗図)

飛鳥川よりたしか也天の川 逸淵

来る秋のとりつきかねし日さし哉 西馬

はつ秋や蜘蛛手ひし庭の松

芭磨

七夕や何にねくらをいそく鳥

音好

深草に声も忍はず啼うつら

其権

平庭や吹井もミえて秋の花

心月

稲妻や草かけうつるさゝれ水

夷哉

きりくす昼鳴捨のくもりかな

波平

朝兒や花のつよミを蔓に見る

古武良

病後

立しほに箒とりけりけさの秋

梅笠

中川舟中

霧晴に遠のく月の匂ひかな

如升

寅のふみ月

董仙書

(朱印)「盛義」

(30) 戸谷家文書No.七六五〇。

(31) 「秋季三題手合」(戸谷家文書No.七九八一)には、無窮庵季蕩に「太魯」

の印を使用しており、一時期「季蕩」の号も使用していたと見られる。

(32) 内野勝裕「樞寮碩布と春秋庵をめぐる人々」昭和六十一年七月。

(33) 一葉舎。版下筆者で、『校正七部集』『俳諧玉葉集』などを刊行した。(松

澤正樹「柴田是真の俳諧一枚摺」前掲『江戸文学』二五)。

(34) 嘉永二年 太魯改魯仙披露(戸谷家文書No.七一五六)

(袋表)「末広 無窮庵」

(是真画扇子に印章図)

立白も神

あつかひや松廼内

太魯改魯仙

松軒書 (朱印)「蜻印」

(35) 嘉永三年 魯仙仏追悼(戸谷家文書No.七二〇一)

(袋表)「氷る露」

雪垣にへたて

られけり鶴と亀

魯仙仏

木兔の耳引たつる夜風かな

逸淵

吹ちるや古梅の木の葉枝ながら

古むら

楮ひて、やせる流や神無月

見外

聞ものにこゝろハふれす初しくれ

松什

鴨たつや闇に見えすく雨のあし

芭丸

茶のなきも今さらくやしはつ時雨

卓郎

人絶のしてから通る雪見かな

西馬

大空に雲ひとつなきかれ野哉

大瓢

やつと眼をはなして去りぬ帰り花

為一

水るとハ氷もしらすや宵のうち

曰二

落る日の影雲に見るしくれかな

誠廬

柴凍て折る音遠くひ、きけり

楽水

入口のさくらもありて冬の山

有柳

眼の先の雪吹にくらぎ夜明哉

雪甫

膝に手をかさねて雪を待日哉

成隣

ちる紅葉窓つき上てなかめけり

玉我

水際の草のミ青き水りかな 一僕

常燈のさす影薄し雪仏 可笠

つなかれて馬ハ軒端にしくれけり 一遊

をし鳥をたゝせて並ふ千鳥哉 一詠

山のやミしはしたゝえて冬の月 如升

初雪の露ものこさず消にけり 青布

露を見し眼もかわかぬに時雨けり 青荷

しとやかな船の夜明て鴨の声 大齡

うきものハ浮ふ木の葉や閑伽の水 知一

立枯の紫苑なつかし雨の門 汝平

月代や真白にたつ水けふり 鳳毛

挿そへた葉にはえもつや水仙花 有志

ついたてに影見るやうそ啼千鳥 つね女

藪の井の氷りをくたく手向哉 榎蔭

雪かせにへたてられけりといたつきの 雪

経舌より出せし魯仙か遺声耳に 梅笠

さらぬにはや辺哭のけふとハなりぬ 雪

雪の鶴啼て我をも泣する歎 梅笠

一周忌いとなまんとこゝろさし侍る 雪

むさしのゝ魯仙仏東都の客中に 梅笠

来りしと見て夢さめけれハ 梅笠

なき人と語りしハさて霜の声 清風

嘉永庚戌仲冬 得齋書(朱印「飛中」)

(36) 圭岳は、原田姓で、字は林広、名は甫、号に鉄圭・後素・賤生がある。

三河出身で鈴木南嶺にまなび、江戸に住む四条派の画家である。

(37) 素真は、山形姓で、江戸の出身、谷文兆の門人で、岡本豊彦、鈴木南嶺

にもまなび、文久二年六月に四五歳で亡くなっている。別号に揺月齋。永海は、佐竹姓で、名・字は周村・愛雪・篤敬。会津若松城下の蒔絵師の子として生まれ、江戸で谷文晁の門人、のちに彦根藩御用絵師となる。

(38) 櫻井武次郎「俳諧―最後の光彩―」(『江戸文学』二二、一九九九年二月)。

松澤正樹「柴田是真の俳諧一枚摺」(前掲『江戸文学』二五)。

(39) 森鷗外「細木香以」。根津美術館「ZESHIN―柴田是真の漆工・漆絵・

絵画」平成二十四年十一月。

(40) 安政四年 香以春興(戸谷家文書No.七二二三)

むかし語りの花咲翁も有ふれたる樹にさかすのミ、ことし

浅草の御山にハいくほともあらぬに数千株の桜を現する事、

造花の神の工はものかハ

きのふまでしらぬ曇りや花の空 抱義

(中略)

千もとの瓊樹ハ菩薩千手の不可思議をあふき、五百重の芳雲

ハ凡夫千眼の遊戯三昧にたりなん

踏とこ残らす花の台かな 西馬

きのふや花柳の前栽をはなれて、紫のわか／＼しき名をあらた

む

植かへし花や今としの方違 光女

けふや金龍の後林に入て花の宴の筵をはしめて開く

品定するも花には栄曜哉 香以

(41) 明治五年 三朝庵曙山春興(戸谷家文書No.七二二九)

おのれいまたまそしに足らねとも、有に甲斐なき身と成て俳

諧の道に立んことかたく、されは夢はかりなる若中に猶行末

の名こそをしけれど、御恵を蒙りし君連にま見ゆることもめ

てたく、此春を名残として身退くことのうたてければ

行水のなかれも斯や百千鳥 三朝庵曙山

表 戸谷家文書俳諧一枚摺一覧

注：「」内は印文。

No.	年月	表題	出所	絵師名	画題	書	寸法(cm) 縦×横	折	袋表	摺物所	袋寸法(cm) 縦×横	文書 番号
1	寛政参丑[5].4		秋香鹿鹿兆、長翠、成美、外17名	「秋香」	唐美人図		18.2×41.5	米				M.7216
2	うし[寛政5].やまひ.		長翠、みち彦、眉山				19.7×26.5	四つ				M.7221
3	[寛政5]		蘭夷、双鳥、筆叢、眉山、其成、月屋、外14名	有文「藤原」 有文「藤原」 有文	桜図(彩色)		39.1×53.0	六つ				M.7225
4	[寛政]		大江丸、月居、双鳥、丈五、士郎、外12名	有文字「藤原」 有文	楓図(淡彩)		38.9×52.0	六つ				M.7226
5	辰[寛政8]..		蘭夷、唐古、双鳥、眉山、外9名	真美「藤原」 真美	神官護摩焚図(彩色)		37.9×51.7	六つ				M.7224
6	寛政丙辰[8]..		京彌夷、其成、江戸双鳥、木葉、泰昌	呉龍亨「呉龍」	石垣・扇図(淡彩)		39.3×52.5	六つ		洛柳舎		M.7227
7	三[寛政9]秋.		秋興(金合探題) 莫二、五芳、みち彦、外6名	莫二(奥羽) 「関島狂而」	唐女人・唐子布團図(彩色)		43.5×57.4	折紙 四つ				M.7215
8	丁巳[寛政9]仲秋.		士朗、其成、外8名				33.2×46.5	折紙 四つ				M.7222
9	[寛政]		不二庵桃屋、大江丸田国、雪中庵定来、律雪庵牛心、任化庵月屋、椒亭蘭夷、外4名				39.3×52.5	折紙 六つ				M.7223
10	寛政2..		おおとも大江丸、雪中、不二、外2名				36.2×49.2	折紙 四つ				M.8051
11	[寛政]		月仙、庵祐、鶴国、貞美、とら国		薄図(空摺)		36.9×49.1	折紙 四つ				M.7217
12	癸酉[文化10]..		乙二、成美、巢氷、道彦、長斎、故土朗、石海、蒼吼、関夷、外11名、「石海」	越后農村「魯斎」	小鳥図(彩色)		43.8×57.0	六つ				M.7228
13	天保庚子[11]歴				梅林図(淡彩)		19.3×26.5	四つ				M.7182
14	壬辰[天保3]春.		九十巻砥布、日東李白		松樹図(彩色)		18.6×25.7	四つ	底なし腸			M.7185
15	とら[天保3]..		砥布、太魯、双鳥、清風、知一、斎泰、外12名	椿年「楚南」	しご(扇図(彩色))		20.0×27.5	三つ	あそひくさ 本庄進			M.7203
16	弘化2夏.		海晏寺山ゆくり六六 さの楓探題				13.0×18.3	三つ	ぼららく(礼「清風君」)			M.7154
17	丁未[弘化4]秋.		太郎彦、梅窓、見外、里雪、卓郎、敦黒、「春秋庵」		桜花・紅葉文		12.8×18.2	三つ	初もさち「春秋庵」			M.7155
18	さる[弘化5]..		梅窓、日二、成功、誠庵、太魯				12.8×13.5	二つ	春興			M.7153
19	さる[弘化5]..		福直、太魯	「平風」	松図(彩色)		12.9×18.0	二つ	春日野			M.7158
20	申[弘化5]はる		太魯、梅窓、仙雲、池留、月孝	圭岳「圭岳」	旭鯛鯛図(彩色)		12.9×27.4	三つ	明はの			M.7172
21	庚申[弘化5]..		成隣、太魯、梅窓	圭岳「積山之權」	扇面図(彩色)		32.0×10.9	横二 つ	末ひの	雲錦堂		M.7179
22	庚申[弘化5]春.		古武良、桂葉、松十、坑甫、外29名	永海「愛雪」	猿曳図(彩色)		21.2×28.2	三つ	富貴寄			M.7189
23	さる[弘化5]..		太魯、大鵬、外8名	圭岳「圭岳」	鳥籠図(彩色)		19.6×18.1	二つ	春の朝			M.7190
24	さる[弘化5]..		太魯、甫木、対龍、淀女、望月	浅水「孝棟」	鳥籠十羽鉢図(彩色)		19.7×18.0	二つ	百千鳥			M.7191
25	弘化(庚申)孟春.		梅窓、いつ、梅窓、三禾、心月	圭岳「圭岳」	植木鉢・鉢図(彩色)		19.7×27.1	三つ	ひのこの日「春秋庵」			M.7193
26	戊申「露水元」弥		一具、見外、西馬、梅窓、大鵬		波文色紙図(彩色)		13.3×18.4	二つ	花筵	雲錦堂		M.7173

No.	年月	表題	出所	絵師名	画題	書	寸法 (cm) 縦×横	折	袋表	摺物所	袋寸法 (cm) 縦×横	文書 番号
27	嘉永甲辰[元]夏	[夏興 文音 客中]	八十翁梅室、梅笠、雪甫		手まり文図、松葉隠縁 (空刷)	松軒書「而真」	12.9×18.2	二つ	ひた夜すし「春」[秋]	雲錦堂	12.9×9.2	No.7159
28	申嘉永元[元]秋	[秋興 客中] [太魯改魯仙披露]	梅笠、如升、鶴鳴、与兵衛、綱大夫		末広、日草図(彩色)	松軒書「晴印」	15.2×15.0	二つ	かたじき「春秋鹿」	雲錦堂	15.2×7.7	No.7157
29	[嘉永2]	[太魯改魯仙]	太魯改魯仙		福寿草、注連飾り図(彩色)	松軒書「晴印」	11.0×14.7	二つ	末広 無窮庵	雲錦堂	10.8×7.5	No.7156
30	酉[嘉永2]春	[春興]	梅笠、真寿、綾綱、田左、任洋		「履」(是真)	松軒書「而真」	13.3×27.4	三つ	筆土しめ	雲錦堂	13.2×9.2	No.7163
31	酉[嘉永2]春	[春興]	梅笠、魯仙、成藤		邊の松馬図(彩色)	松軒書「晴印」	13.2×18.2	二つ	春興「春」[秋]	雲錦堂	13.2×9.7	No.7169
32	酉[嘉永2]春	[春興]	梅笠、魯仙、青布、誠藏、外3名		羽根帯図(彩色)	松軒書「而真」	13.2×27.7	三つ	春興「春秋鹿」	雲錦堂	13.2×9.6	No.7170
33	己酉[嘉永2]春	[春興]	梅笠、魯仙、楚南、収呂、玉雲、秀谷、一溪		貝桶図(彩色)	松軒書「晴印」	13.2×27.8	三つ	花の春「春」[秋]	雲錦堂	13.4×9.5	No.7176
34	己酉[嘉永2]春	[春興]	梅笠、魯仙、青布、外6名		火鉢図(彩色)	松軒主人「晴」	20.0×27.3	三つ	初日影「春秋」	雲錦堂	20.0×9.4	No.7192
35	嘉永己酉[2]春	[春興]	八十翁梅室、古武良、為山、西馬、逸齋、心月、梅笑、清風、梅笠、外9名		竹欄図(淡彩)		20.0×27.6	三つ	初手水「春秋鹿」	雲錦堂	19.9×9.5	No.7198
36	己酉[嘉永2]春	[春興]	氷住、清風、貞郎、逸淵、一具、由譽、梅笠、見外、古武良、孤竹、外31名				19.8×27.2	三つ	わかみどり		19.6×9.4	No.7200
37	己酉[嘉永2]春	[春興]	日二、魯仙、梅笠、外16名		御前料理図(彩色)	松軒書「而真」	20.3×43.3	四つ				No.7204
38	己酉[嘉永2]桜	[春興]	秀眺、如升、梅笠、外8名、「春秋鹿」				15.1×20.0	二つ	勃生空「秀月連」	京都住吉町 雲錦堂製	15.0×10.2	No.7178
39	辰[嘉永3]春	[春興]	梅笠、而耕、鳳山、友山、成功、成隆、外6名		御車・手まり図(彩色)	松軒書「晴印」	13.0×27.2	三つ	はつ卯「春秋」	雲錦堂	13.0×9.3	No.7162
40	辰[嘉永3]春	[春興]	一遊、梅笠、里花、千枝、一旅		能面図(彩色)	松軒書「晴印」	13.0×18.3	二つ	いねあがる「春秋」	雲錦堂	13.0×9.3	No.7164
41	辰[嘉永3]春	[春興]	大爺、梅笠、教、逸淵、湛水、外5名		籠房 若船・水引き・梅花図 (彩色)	松軒書「晴印」	13.1×27.1	三つ	じし春	雲錦堂	13.1×9.6	No.7165
42	辰[嘉永3]春	[春興]	梅笠、如升、鶴鳴、箕積		福寿草図(彩色)	松軒書「晴印」	12.7×17.8	二つ	東方・花月連「春秋」	雲錦堂	12.7×9.0	No.7167
43	辰[嘉永3]春	[春興]	梅笠、逸淵、西馬		松葉図(空刷)	董仙事「宗福」	13.2×18.2	二つ	三節 三つ物「春」 [秋]	雲錦堂	13.1×9.1	No.7171
44	辰[嘉永3]春	[春興]	梅笠、茂林、其水、角丈、布水、甫次、外5名		七草鉢図(彩色)	松軒書「晴印」	13.0×27.2	三つ	幸龍「春秋」	雲錦堂	13.0×9.3	No.7174
45	辰[嘉永3]春	[春興]	梅笠、「未屋」[春秋鹿印]		雪結晶図(彩色)		18.9×16.9	二つ				No.7188
46	辰[嘉永3]春	[春興]	梅笠、而耕、山明、千代、如泉、外7名		雀紙図(彩色)	松軒書「安雲」	19.7×27.4	三つ	井開 花丘連「春秋鹿」	雲錦堂	19.7×9.7	No.7196
47	辰[嘉永3]春	[春興]	梅笠、成功、井寒、而耕、成隆、名		六立図(彩色)	松軒書「表雲」	19.5×27.6	三つ	蓮方	雲錦堂	19.5×9.5	No.7199
48	庚辰[嘉永3]初夏	[夏興]	葛六、和柳、第三、西馬、梅珍、外5名		障子(彩色彩)	繪圖「秀」	21.2×56.3	六つ	馬のはむけ 梅珍 九齋案入		22.0×9.9	No.7207
49	庚辰[嘉永3]夏	高輪御興	梅笠「春」[秋]、葛五、巨丸、静山、もと女、大爺		松文(空刷)	松文(空刷)	12.5×12.6	二つ	早すし「春秋鹿」		12.5×6.4	No.7152
50	嘉永庚辰[3]冬	[魯仙(仏追帖)]	清風、梅笠、逸淵、古武良、見外、松竹、巨丸、卓郎、西馬、成隆、外22名			待斎書「兼中」	19.8×27.6	三つ	永る露		19.7×9.4	No.7201
51	嘉永辛卯[元]	[歳旦] 表御興 [春興 表御興 成春秋鹿披露]	梅笠、木芳、如平、鶴鳴、甄志良、波平、静山、櫻蔭		竹子・木引図(彩色) 蔭のどう図(空刷)	松軒書「晴印」	13.4×18.5	三つ	御慶「春秋鹿」		13.3×9.3	No.7166
52	辛亥[嘉永4]春						13.0×17.8	二つ	はつ現			No.7175

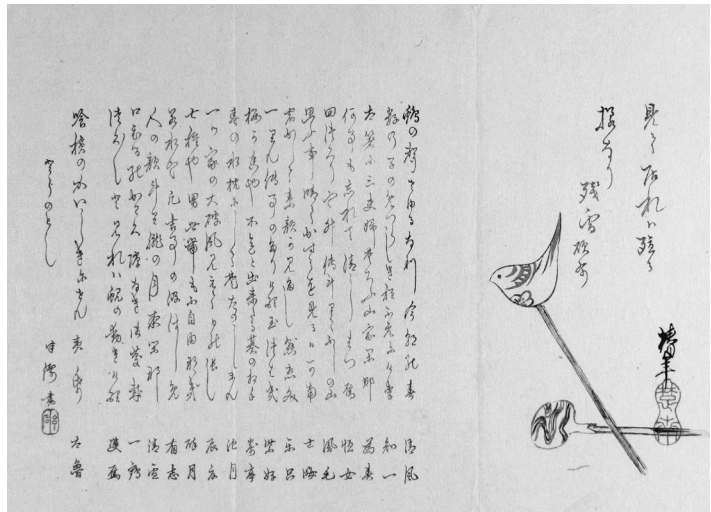


図1 No. 15 椿年画 本庄連春興 天保13年(戸谷家No.7203)

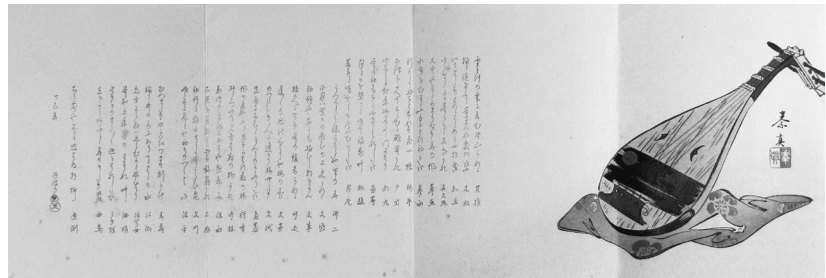


図2 No. 72 素真画 本庄連春興 安政4年(戸谷家No.7211)

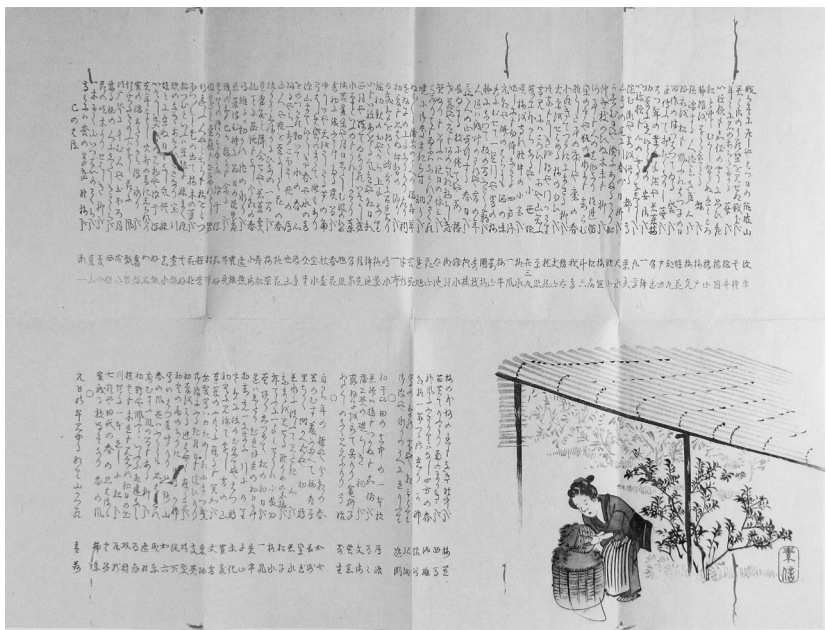


図3 No. 71 素信画 樞寮閣春興 安政4年(戸谷家No.7208)



図4 No. 75 素真画 武蔵野連春興 安政6年（戸谷家No. 7210）

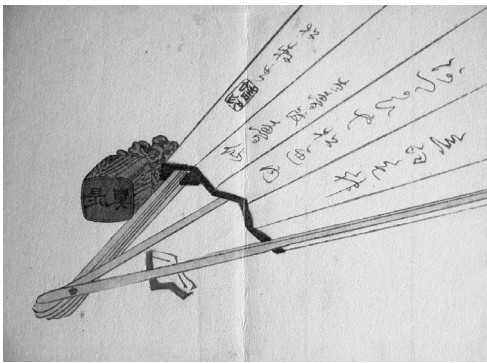


図6 No. 29 是真画 太魯改魯仙披露 嘉永2年（戸谷家No. 7156）



図5 No. 60 素真画 梅雪庵秋興 嘉永7年（戸谷家No. 7205）

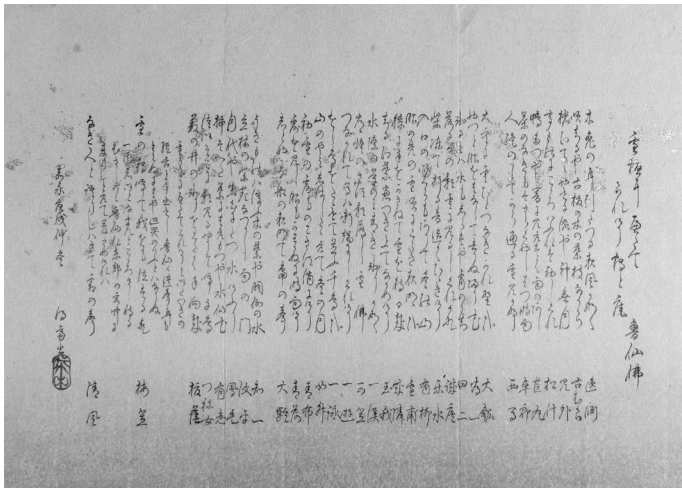


図7 No. 50 魯仙仏追悼 嘉永3年（戸谷家No. 7201）

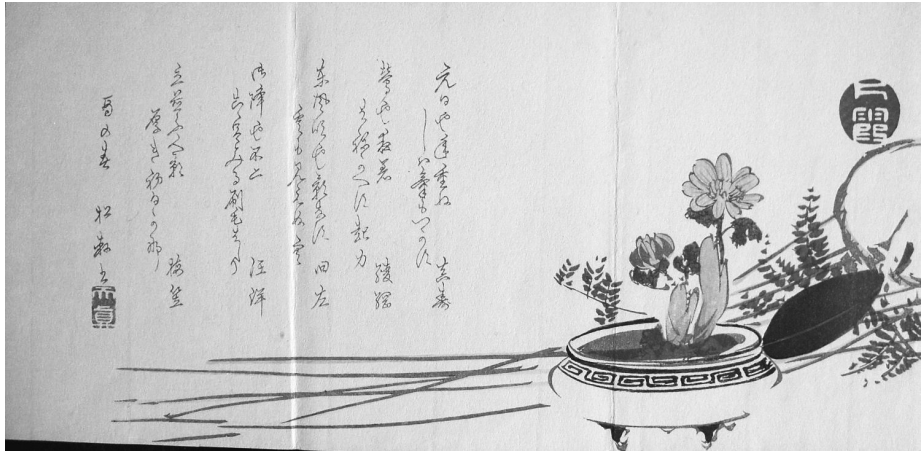


図8 No. 30 是真画 梅笠他春興 嘉永2年(戸谷家No.7163)

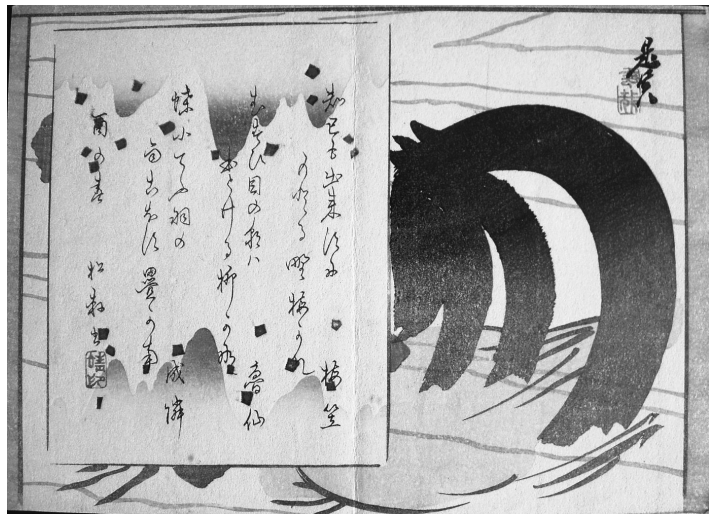


図9 No. 31 是真画 梅笠他春興 嘉永2年(戸谷家No.7169)

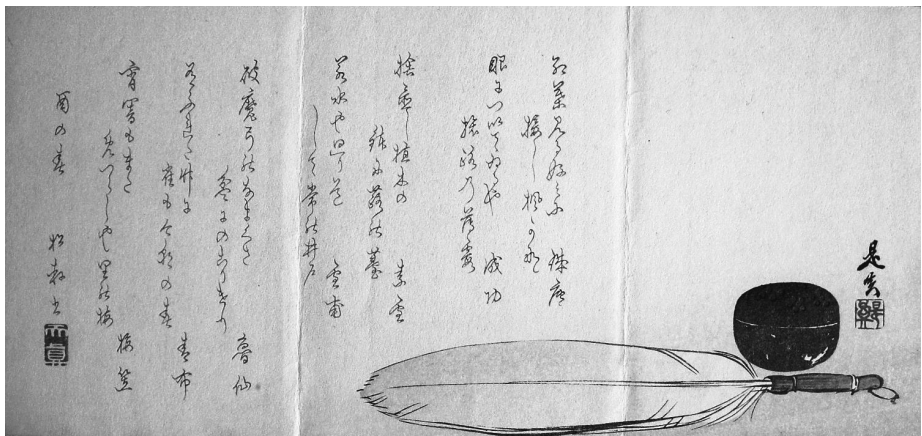


図10 No. 32 是真画 梅笠他春興 嘉永2年(戸谷家No.7170)



図 11 No. 35 是真画 梅笠他春興 嘉永 2 年（戸谷家No. 7198）

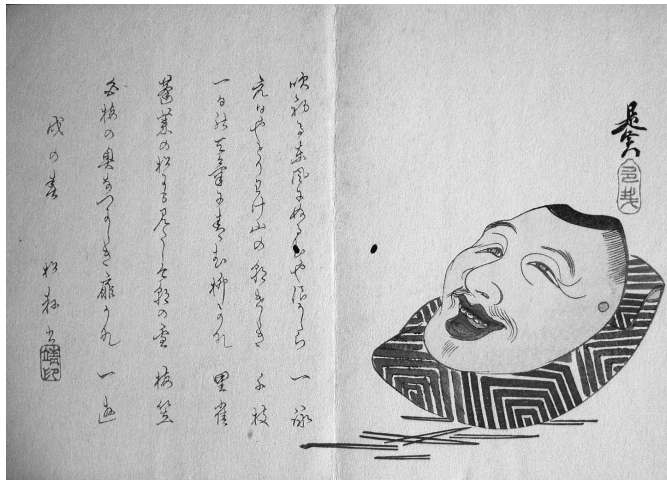


図 12 No. 40 是真画 梅笠他春興 嘉永 3 年（戸谷家No. 7164）

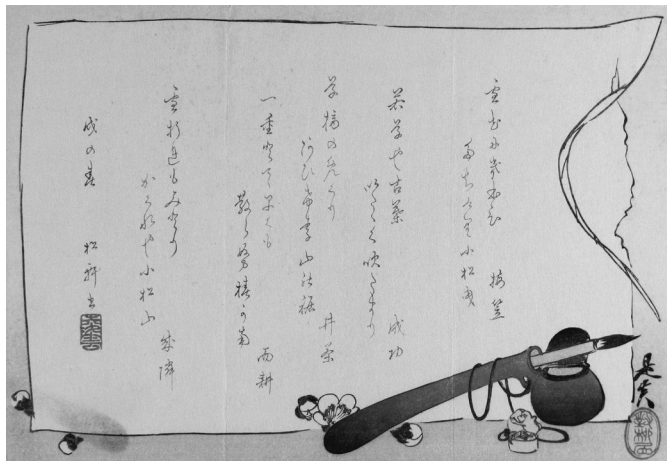


図 13 No. 47 是真画 梅笠他春興 嘉永 3 年（戸谷家No. 7199）

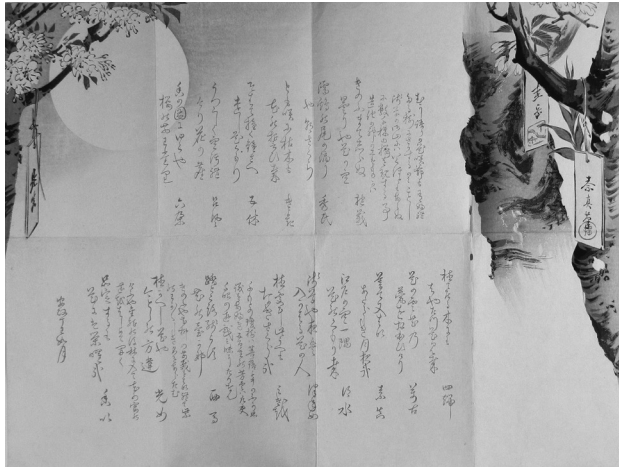


图 14 No. 73 是真・圭岳・素真画 香以他春興 安政 4 年 (戸谷家No. 7213)



图 15 No. 74 是真画 香以他春興 安政 4 年 (戸谷家No. 7230)

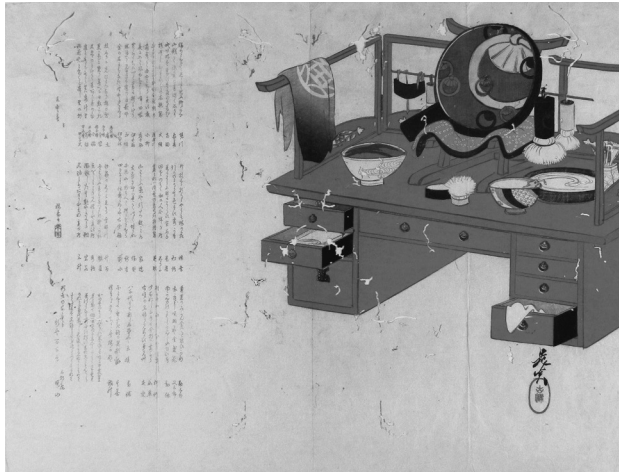


图 16 No. 77 是真画 三朝庵曙山他春興 明治 5 年 (戸谷家No. 7229)